

# ドリームキャンプ 新たな展開へ

## 地元高校生スタッフ8名参加

7月28日(金)～30日(日)  
宮城県・気仙沼大島キャンプ場



気仙沼と大島をつなぐ気仙沼大島大橋（2018年度開通予定）

# ひかり新聞

共生共助の社会をめざす

2017.7.7  
No.31

一般社団法人  
ひかりプロジェクト

「仮設住宅の中で窮屈な生活を強い  
られている子どもたちに、せめて3日  
間だけでも、自然の中でのびのびと過  
ごしてほしい」という願いで始まっ  
たドリームキャンプも、今年は6回目  
を迎えます。

このキャンプに参加する子どもたち  
が主に住む、気仙沼市を中心とした三  
陸沿岸の各地では、災害公営住宅の建  
設が進み、仮設住宅は徐々に姿を消し  
つつあります。そういう点では、ドリ  
ームキャンプの当初の願いであるその  
役割は終えたのかなと思います。

しかし、津波被害に遭った街はまだ  
まだ復興の途中です。これは気仙沼に  
限らず、その周辺の陸前高田、大船渡、  
南三陸も同じです。

津波でさらわれた沿岸の商店街も、  
ようやく仮設の復興商店街から本格的  
に建設された商店街へと姿を変えつつ  
ありますが、店主の高齢化、後継者問  
題、さらに周辺の人口減などの理由で  
お店を閉じるところもあります。

したがって、ドリームキャンプの  
役割は、今後の街の活性化につながる  
「参加する子どもたちに、将来の地域  
リーダーとして育ててほしい」という  
ところに移りつつあります。

今年4月から始まった「ドリームキ  
ャンプごども食堂」も、同じことが言  
えます。そこに集まってくる子どもた  
ちが、先々主体的に関わって運営スタ  
ッフとなり、さらに地域のリーダーに  
なっしてほしいという願いも込められ  
ています。

さて、そのような中で、今年の参加  
希望者は、

小学低学年（1～3年）40名

小学高学年（4～6年）64名

中学生 19名

合計123名となりました。

会場やスタッフ、資材の受け入れ態  
勢から、誠に申し訳ないのですが、

全ての参加希望者を受け入れられない  
状況です。

傾向を見ると、当初から比べ、中学  
生の参加希望者が非常に増えました。  
最初の頃は、小学高学年の参加希望者  
が多く、それに対して、中学生はごく  
僅かでした。そこで、できるだけ多く  
受け入れるために、第3回から小学6  
年生はジュニア隊（本来中学生のキ  
ャンプ）に入ってもらいました。それが  
第5回まで続いてきたのです。

先日のスタッフ会議で、先に述べた  
このキャンプのこれからの願いや参加  
希望者の動向などを踏まえて、奥原幹  
雄実行委員長からの提案もあり、ジュ  
ニア隊は中学生だけとすることに  
なりました。またジュニア隊のプログラ  
ムも、参加者にサブリーダー的な役割を  
持たせ、ネスト隊（小学4～6年）と一  
緒になって行うプログラムも検討され  
ています。

とはいえ、「今度はジュニア隊」と思  
っていた子どもたちや、小学高学年の  
子どもたちにしわ寄せがいき、申し訳  
なく思っています。

\*

今年も会場は気仙沼・大島です。

このキャンプが、安全で快適、また  
子どもたちにとって素晴らしい思い出  
となるよう、しっかりと準備し、取り  
組んでいかねばなりません。

スタッフは7月1日現在、55名の申  
込みがありました。特徴として、地元  
の高校1年生8名がスタッフとして参  
加してくれることです。これも新たな  
展開に向けた動きと言えるでしょう。

（第6回ドリームキャンプ実行委員会）

# 熊本で移動図書館活動

移動図書館おあしす 橋本 信一（熊本県上益城郡）



仮設住宅に入居できる方は、自宅が全壊、大規模半壊、半壊の方々に、一瞬にして家をなくした方々がほとんどです。しかも木山仮設団地は、被害が大きかった寺迫、木山、宮園地区の方が多く入居されています。

「地震と同時に廃業です」と言う美容室を営んでいたTさんは、「お店も自宅も何にも無くなってしまう……」余震があると地震当口のことを思い出して怖い」と言いつつ、図書館に終日おられる時もあります。

地震から一年が経ち、少しずつですが「親しかった友人が死んだんです」「私は家族、親族三人を亡くしました」と、図書館に来た方が、当時のことを話してくださるようになりました。Nさんもその中のお一人。

「新聞記事をまとめた本があるでしょ？ 私、その本を借りたいの」「地元新聞社が、紙面に掲載した地震関連の記事を取りまとめて、『地震後1か月の記録』として出版しており、その本を貸してほしいと言われました。

移動図書館ではそれまで、地震の様子を記録した写真集や地震関連の本は所蔵していませんでした。それは「写真や記事に触れて当時のことを思い出し、辛い気持ちになる人がいるかもし

れない。しばらくはそうした書籍は仮設団地へは持ち込まない」という判断からでした。しかし、Nさん

から「ぜひとも」とのことでしたので『記録』を買い求め、お届けしました。するとNさんは「この本を譲ってほしい」とおっしゃるのです。「死んでいった友人の『記録』を、私の手元でしっかりと保管したいんです」と。

Nさんは、地震で顔を怪我して血だらけになり、またご主人は、近所の人たちが崩れた家の中から引っ張り出してくれたそうです。そうした中、隣に住む友人は懸命な救助活動にも拘わらず亡くなられたというのです。その様子が『記録』に記されていました。

## はるかかのみまわり

現在、木山仮設団地では、ひまわりを育てています。

このひまわりは、復興のシンボル「はるかかのみまわり」です。

今から22年前、阪神・淡路大震災で当時11歳の加藤はるかさんが亡くなりました。その年、はるかさんの自宅跡にひまわりが咲き、ご近所の人たちは、このひまわりを「はるかさんの生まれ変わり」、そして「復興のシンボル」として、大事に育ててこられました。

東日本大震災のとき、そのひまわりが受け継がれ、そして、昨年の熊本地震のときにも、矢野明子さん（移動図書館のスタッフ）が中心となって、木山中学校にひまわりを咲かせました。

木山仮設団地で育てているひまわりは、木山中学校から種を受け継いだ「はるかかのみまわり」です。

仮設の住民の方々が、花壇作りや水やりなどを主体的に担当し、大事に育てておられます。

ひかりプロジェクト、ドリームキャンプ実行委員会からご支援いただいたプランターには、子どもたちや住民の方々が、絵やメッセージを書き入れてくれています。「益城100パー（セント）げんきで、すすんでいけ」「前進あるのみ」というメッセージには、強い願いが込められています。

復興に向けて、そうした願いが成就していくように祈りを込めて、継続した支援活動を進めていきたいと思っています。

これまでの、全国の皆様方からの温かいご支援にお礼申し上げます。そして今後とも、さらなるご支援をお願いいたします。



「はるかかのみまわり」の種を蒔く子どもたち

平成28年の熊本地震で、家族や家をなくした方々が住む仮設団地で、移動図書館活動を行っています。昨年の11月から活動を開始しました。最初は「本や活字は読む気がしない」と言っていた方も、今では、毎週図書館を利用しておられます。熊本県下には、仮設団地が108か所420戸（あり）あります。そのうち、私たちが活動している場所は、木山仮設団地（220戸約570人が入居）です。今後さらに巡回地を増やしていきたいと願っています。毎週金曜日、団地内の集会所で図書館を開設し、いつも40～50人の方に利用していただいています。

# 「こども食堂」始めました

ドリームキャンプ実行委員長 奥原 幹雄



4月29日(土)に「ドリームキャンプこども食堂」がスタートし、早くも2ヵ月余りが経過しました。月に1度のこども食堂開店を目標に、5月、6月とあわせて3回の開催を終えました。

これまで利用した子どもの数はおよそ60名、お母さん達やボランティアさんを含め、100名近くの方々がこども食堂に参加し、食事のお手伝いをしたり、子どもと一緒に遊んだり、関わりを持ってくれました。また遠方よりお米を支援してくださる方、ご寄付をくださる方など、皆さまに支えられ、応援されているのを感じながら、ここまで取り組むことができ、真に有り難いことだと思います。

初めての取り組みで、いろいろな人にアドバイスを求め、書籍を参考に準備を進めたり、情報を求めて動き、吸収していくことが多かったです。それはこれからも変わらず、食事の献立にしる、子どもへの対応にしる、常に学びアップデートしていかなければいけないと思います。なにしろ始まったばかりなので、どこのこども食堂も手探りのなか、子どもや地域のニーズをつぶさに拾い、試行錯誤で取り組まれているのが現状です。だからこそ毎日が新鮮で、いろいろな子どもに出会うことができ、「こども食堂は楽しい!」と全国に拡がり、いま私もその楽しさを味わい、噛みしめているところです。

○

とある宗教の高徳な師が聴衆に向けて話しました。「そこに座っているということが、人の座る場所を取っているのだと考えなさい」と。それを聞かれたある師が「人間が『生きてい

## ■開催案内

今回は9月に開催します。

- ・日時：2017年9月16日(土) 11時～16時
- ・場所：宮城県気仙沼市南町1-2-15  
金光教気仙沼教会
- ・料金：こども 無料  
高校生以上 200円(寄付として)

## ■ご寄付・ご支援のお願い

- ・寄付金、食材(お米、野菜、果物、他)
- ・遊び道具(マンガ本、ボードゲーム  
カードゲーム、他)

## ■ご相談受付

- ・「こども食堂」をやってみたいという方、ご連絡お待ちしております。経験を踏まえ、アドバイスさせていただきます。

## ■ご連絡・お問い合わせ先

- ドリームキャンプ実行委員長 奥原 幹雄
- ・携帯電話：090-7426-3413
  - ・メール：mikiox1975@gmail.com
  - ・ホームページ：

<https://www.dreamcamps.info/>

る』ということの上で大切なポイントだと理解した」

と書かれた回顧録を読み、私は、こども食堂の働きを思い浮かべました。

子どもに限らず、私たちは普段の生活の中で、自分の居場所というものを持っています。自宅や職場など、長い時間過ごす場所のことを思い浮かべる人もいれば、家族や仲間など、人間関係の中に自分の居場所を見出す人もいます。ところが、その居場所がひとたび居心地が悪い場所となり、人間関係の悪化から仲間に入れず、自分の居場所を失えば、たちまち生きた心地がしない。孤立し孤独感を味わうことになります。

大人であれば自分の環境を自分で変えることもできますが、子どもにとってみれば、自宅、学校、地域がその子の居場所です。子どもは自力でそこから逃れることはできません。そこに自分の居場所がなければ、生きているという実感は持てないでしょう。ただ辛いだけの毎日。それはスペースの問題ではなく、心の居場所の問題だと思うのです。

こども食堂の意義は、いろいろあると思いますが、子どもに食事を提供するだけに留まらず、子どもの居場所、大人の居場所、心の居場所として、「お腹も心も満たされるような場所が、地域にあったらいいね!」という声に応えられるような「こども食堂」が造られたらいいなと思います。

# 長い間のご支援 有難うございました

福島県郡山市

橋長 孝三郎

金光教みちのくボランティア隊として平成25年11月から始まった郡山南一丁目仮設住宅への支援活動も、福島県の仮設住宅入居期限が平成29年3月末までということに終了することになりました。その間、食糧支援に加え「音楽と踊りを楽しむ会」「出前のそば教室」、秋には貸切バスでの温泉と紅葉狩り、クリスマスにはショートケーキと手羽先等、季節に応じたご要望にできるだけ沿えるような支援活動をしてきました。

また「ひかりツアー」や東北教務センター主催「教区教会長教師集会」で仮設住宅を訪れ、自治会長の志田篤さんから「仮設住宅における現状と今後の課題」を聞かせてもらう機会を作ることができました。



川内村仮設の皆さんと「温泉・紅葉狩りバスツアー」  
裏磐梯・檜原湖にて 2015.10.23

これは、支援当初から志田さんと懇意なお付き合いができたことの現れだと思っています。支援活動を通して志田さんは、金光教は「人が助かる」そのことだけを願っている純粋な宗教であることを認めてくださいました。そして、平成28年3月6日、福島で行われた東日本大震災五年祭の時には「原発事故により避難している被災者体験の発表」を快く引き受けてくださいました。

## ワカメ支援

大津波により甚大な被害を受けた被災地、石巻の小淵浜養殖業者からワカメを買い入れ、原発事故で避難を余儀なくされた郡山南一丁目仮設住宅の皆さまへワカメを届けるという、被災者同士への橋渡しの支援活動ができたことも忘れられないことの一つです。これが縁で、当教会では今でも石巻支援のワカメバザーを続けています。

また『ひかり新聞』にワカメ支援のお願いを掲載していただいたところ、多くの方からご支援を頂きました。紙面をお借りして、厚くお礼を申し上げます。

## インターネットでSOS

支援活動を振り返ってみて、学んだことがあります。この支援活動は、仮設住宅での困窮を見かねた志田さんが、インターネットを通してSOSを発したことに始まります。それを見た

京都の芝本さんという方が、金光教本部に支援の要請をお願いされました。そして、私の所に本部から実態調査の依頼がきたのです。もし志田さんからのSOSがなければ、郡山に住んでいるながら、仮設住宅で暮らしている人たちの苦しみを、今でも私は分らなかつただろうと思います。

その意味において、声をあげることの大事さを知りました。決して一人で悩まない、諦めない、人に助けを求め、必ず誰かが救いの手を差し伸べてくれます。そのことを強く実感した支援活動でもありました。

## 九州北部豪雨のお見舞いを申し上げます

7月5日から6日にかけて、福岡・大分両県を中心とした記録的な豪雨により、土砂崩れや河川の氾濫で多くの集落が孤立、またかなりの死者・行方不明者が出ている模様です。

7月7日正午の時点で、大分・福岡両県での死者7名、行方不明者26名、また多くの地区で電話の不通により安否確認が取れない方が多数おられるとの報道です。

さらに、昨年4月の熊本地震で被災された地域もどうなっているのか心配されます。

このたびの豪雨災害で被災された皆様方に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早く安心・安全な生活を取り戻されますよう、お祈り申し上げます。

一般社団法人 ひかりプロジェクト

★今号より紙面の大きさが変わりました。AB版というサイズで、パソコンやタブレットでも気軽に見ていただけるように…（編集長）



## ひかり募金にご協力をお願いいたします。

- ★ゆうちょ銀行  
記号 10890 番号 16718311
- ★郵便振替  
記号番号 00210-2-137823  
一般社団法人 ひかりプロジェクト

『ひかり新聞』をお読みいただいている皆様の温かいご支援とお祈り添えのもと、神様の後押しを受けながら、3年余りにわたる支援活動も無事終えることができましたことをここに報告し、お礼の言葉とさせていただきます。有難うございました。

## ひかり新聞

No.31 2017年(平成29年)7月7日

発行者：一般社団法人 ひかりプロジェクト

〒401-0304 山梨県南都留郡富士河口湖町河口1975

電話 0555-72-8191 FAX 0555-76-6696

https://hikari-project.jimdo.com/ E-mail : hpa@road.ocn.ne.jp